



大学間連携による医療・福祉の共修授業からみた オンライン授業による効果の考察

奥村あすか¹⁾, 吉田麻衣¹⁾, 足立耕平¹⁾, 潮谷有二²⁾, 前田隆浩³⁾, 永田康浩⁴⁾

- 1) 長崎純心大学医療・福祉連携センター
- 2) 慈愛園老人ホーム
- 3) 長崎大学病院 総合診療科
- 4) 長崎大学生命医科学域地域包括ケア教育センター

I. 背景

- 超高齢社会において医療と介護・福祉の連携強化が求められており、地域包括ケアシステムに関わる専門職の育成として、本人と家族、生活背景、地域全体を意識した働きかけができる専門職人材の養成に向けた多職種連携教育に対する期待が高まっている。
- 長崎大学医学部と長崎純心大学は、2015年から「学習背景の異なる大学及び学科の学生が、医療と保健と福祉に関する共修の場を通じてお互いの視点を知り、将来の多職種連携に繋がる資質を身につける」ことを授業目標とし事例検討による共修授業を両大学の正規カリキュラムとして行ってきた。
- 2019年度までは対面でグループワーク形式の共修授業であったが、2020年度は新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、完全オンラインで開催した。

日本医学教育学会大会 COI開示

筆頭演者名：奥村 あすか

演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある
企業などはありません。

I. 目的

両大学による共修授業の効果を明らかにするとともに、2019年度から2020年度にかけて授業形態の変更がもたらした影響について検討した。

II. 方法

長崎大学医学部医学科および保健学科、長崎純心大学の学生を対象として、共修授業の1日目授業前後、2日目の授業終了後に、授業目標の達成度を測る質問票を作成し自己評価により回答させた。

2019年度と2020年度の共修授業の内容

年度	2019年度	2020年度
事例	事例1：72歳男性。認知症、脳梗塞後右片麻痺や高血圧症。要支援2の妻との二人暮らし。妻が見当識障害を有する。 事例2：40歳女性。乳がん、多発脳転移。要支援1の母との二人暮らし。本人と母との意向に齟齬がある。	
グループ編成	<ul style="list-style-type: none"> 各事例ごとに20グループ（合計40グループ） 原則、1グループにつき医学科生3～4人、保健学科生2～3人、長崎純心大学生0～1人 	
グループワーク	【Work1】患者・家族の意向の抽出・患者の目標となる姿の設定 【Work2】予測も含めてニーズを抽出し、強み、弱みを考える 【Work3】弱みを考慮するとともに、強みを活用した支援を考える ニーズに対応するサービスや社会資源を考える 【Work4】社会資源、職種及びその役割の可視化	
授業形態	対面形式のグループワーク	Zoomを用いた完全オンライン

質問票

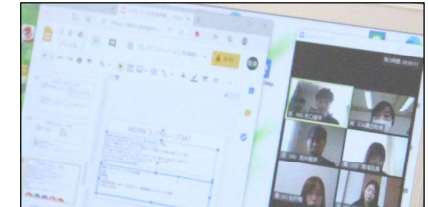
- 質問票は、2019年度は自計式の質問紙、2020年度は自計式のGoogleフォームを用いた。
- 1日目の授業前、1日目の授業終了後（以下、1日目評価）、2日目の授業終了後（以下、2日目評価）の3時点で調査を実施し、1日目評価と2日目評価の2時点で内容が共通する9項目についての分析を行った。

2019年度と2020年度の共修授業の様子

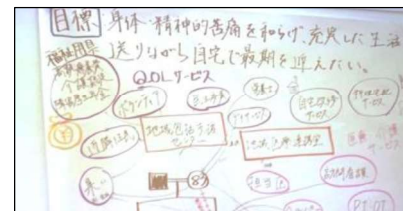
2019年度（対面）
対面グループディスカッション



2020年度（オンライン）
Zoomによるグループディスカッション



模造紙によるプロダクト作成



Googleスライドによるプロダクト作成



分析に用いた質問項目

EC: Evaluation Criteria

- EC1 私は、自己の目指す専門職の仕事内容や役割を、他の大学・学科生に説明できた。
- EC13 私は、自分の考えを他の大学・学科生に伝えることができなかった（R）。
- EC14 私は、自分の専門分野に対する興味・モチベーションを向上させることができた。
- EC21 私は、グループワークを通して他の大学・学科生と協働して課題解決に取り組む重要性を実感できた。
- EC22 私は、グループワークを通して、指示事例の目標となる姿を提案することができた。
- EC23 私は、グループワークを通して、指示事例に対する具体的支援策を提案することができた。
- EC24 私は、地域住民が地域で生活するための医療のしくみを理解することができた。
- EC25 私は、地域住民が地域で生活するための福祉のしくみを理解することができた。
- EC26 私は、医療職と福祉職とが連携することの意義について理解することができた。

※(R)：反転項目

「そう思う」に4点、「どちらかといえばそう思う」に3点、「どちらかといえばそう思わない」に2点、「そう思わない」に1点を配点し、測定した。

分析方法と対象

- 質問項目に対する年度（2019と2020）及び時間（1日目と2日目）の変化について検討するために、共修授業の実施年度を独立変数とする反復測定分散分析を行った。
- 1日目評価と2日目評価の差について、実施年度で比較するために、実施年度を独立変数とする対応のない検定を行った。
 - 分析はR ver.3.6.3及びRのパッケージであるRcommnder,RcmdrPlugin.EZR(KANDA, 2013)を使用した。
 - 分析対象者：分析に用いた項目に欠損値を有しないケース

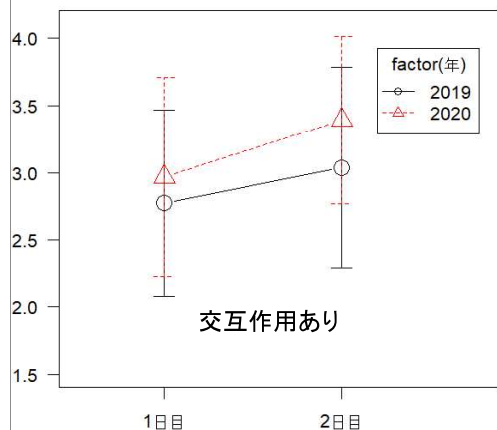
参加者数と分析対象者数

大学, 学科	2019年度（対面）		2020年度（オンライン）	
	参加者数	分析対象者	参加者数	分析対象者
長崎大学医学部				
医学科2年生	129	110	125	97
保健学科2年生	106	95	93	80
長崎純心大学人文学部				
地域包括支援学科3年生	24	12	16	13
地域包括支援学科4年生	16	11	4	4
人間心理学科4年生	—	—	4	3
大学院臨床心理学分野1年生	—	—	8	8
合計	275	228	250	205

交互作用について例示すると、EC1とEC26は年度、時間の主効果がともに認められたが、交互作用も見られたEC1は、2019年度（対面）と比較して、2020年度（オンライン）の方が上昇率が大きいことが示された。

EC1

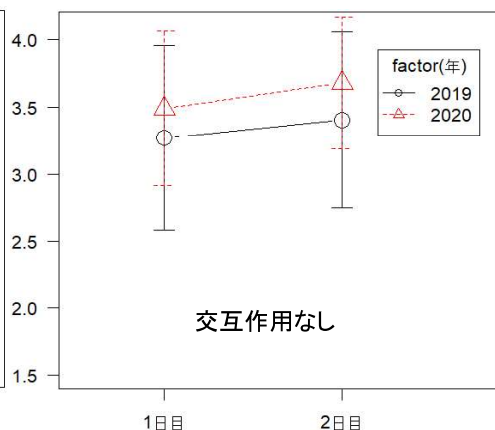
「私は、自己の目指す専門職の仕事内容や役割を、他の大学・学科生に説明できた。」



交互作用あり

EC26

「私は、医療職と福祉職とが連携することの意義について理解することができた。」



交互作用なし

III. 結果（1）

- ほぼ全ての項目で年度の主効果が見られ、2020年度の方が2019年度より有意に得点が高かった。
- 交互作用が見られた項目：**EC1, EC24, EC25**
- 年度の主効果と交互作用に統計的に有意差が見られなかった項目：**EC13**

反復測定分散分析の結果

質問項目	年度 主効果	時間 主効果	年度×時間 交互作用
EC1	p<.001	p<.001	p<.05
EC13	n.s	p<.05	n.s
EC14	p<.001	p<.001	n.s.
EC21	p<.01	p<.01	n.s
EC22	p<.001	p<.001	n.s
EC23	p<.001	p<.001	n.s
EC24	p<.01	p<.001	p<.01
EC25	p<.01	p<.001	p<.05
EC26	p<.001	p<.001	n.s

- 有意差は、年度の主効果では2020年度の方が高く、時間の主効果では2日目評価の方が高かった。

結果（2）

各年度内において1日目から2日目にかけての差（ Δ ）を比較すると、交互作用が見られたEC1, EC24, EC25では有意に上昇したことが検定でも確認された。

各年度の1日目と2日目の比較

項目	2019年度 Δ (2日目-1日目)	2020年度 Δ (2日目-1日目)	p値
EC1	0.26(0.85)	0.42(0.72)	0.035
EC13	0.07(0.95)	0.15(1.16)	0.450
EC14	0.19(0.83)	0.23(0.66)	0.531
EC21	0.04(0.80)	0.19(0.69)	0.051
EC22	0.12(0.69)	0.20(0.63)	0.227
EC23	0.11(0.69)	0.15(0.64)	0.568
EC24	0.21(0.69)	0.40(0.64)	0.002
EC25	0.22(0.72)	0.37(0.63)	0.021
EC26	0.14(0.74)	0.19(0.61)	0.406

- 括弧内は、標準偏差

IV. 考察

- 反復測定分散分析やt検定の結果から、共修授業の達成目標として掲げているEC1「専門職の仕事内容や役割を説明」や、EC24とEC25「地域で生活するための社会資源の理解」に関する項目に交互作用が見られ、2020年度共修授業の2日間にかけての差が顕著に上昇していたことから、授業による学習効果とともにオンラインによる相乗効果と考えられた。
- 一方、達成目標の項目のひとつであるEC13「自分の考えを他大学・他学科の学生に伝えること」は、年度の主効果や交互作用が見られなかったことから、今後の課題と考えられた。

V. 結語

- 新型コロナウイルス感染症の影響により行われたオンライン共修授業では、対面授業に相当する教育効果が確認された。しかし、将来の多職種連携で求められる「自分の考えを述べる」点については、オンライン授業においても改善はみられず、今後の教育上の重要な課題と考えられた。